

第5 回中之島映像劇場

浪花の映像【キネマ】の物語——東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品から——

Osaka Cinema Stories: Co-organized with National Film Center, The National Museum of Modern Art, Tokyo



《地下鉄の出来るまで》(1938年/15分)



溝口健二《浪華悲歌》(1936年/72分)

【日時】2013 年3 月16 日(土)、3 月17 日(日)両日とも

13:00からA プログラム(冒頭に15 分の解説付き)

15:00からB プログラム

【会場】

国立国際美術館B1階講堂

入場無料／全席自由／先着130 名(午前10 時より各プログラムごとの整理券を配布／1名様につき1枚)

※各プログラム入れ換え制です。

【上映作品(いずれも35mmフィルム)】

A プログラム(記録映画編:53 分):

《アサヒドモグラフィ No.19》(1939 年／製作:朝日新聞社／9 分／トーキー)

《地下鉄の出来るまで》(1938 年／製作:テラダ映画／15 分／サイレント)

《大阪倉庫の爆発》[不完全版](1917 年／製作:天活(大阪)／4 分／サイレント)

《朝日は輝く》(1929 年／製作:日活・朝日新聞社／監督:伊奈精一・溝口健二／25 分／サイレント)

B プログラム(劇映画編:72 分):

《浪華悲歌【なにわえれじい】》(1936 年／製作:第一映画／監督:溝口健二／72 分／トーキー)

【企画主旨】

地元、大阪の映像を探訪する：

今回の主題は、他ならぬ「大阪」です。時代は戦前。とはいえ、単なる回顧に留まるものではありません。この都市の持つ力が様々な局面で発揮されていた時代の映像を辿ることは、現在の大阪の姿と照らし合わせ、将来像を描くよすがになるのではと考えています。

記録映画と劇映画とを問わず、先鋭的な映像を紹介する：

映像は優れた記録のメディアです。それとともに、卓越した表現のメディアでもあります。記録と表現という2つの位相は、実は劇映画や記録映画というジャンル分けにかかわらず、あらゆる映像作品に共存しています。今回のプログラムは記録映画編と劇映画編とに分けていますが、あくまでも便宜的なものです。溝口健二が双方の作品を監督していることが一つの証左です。どの作品も、内容的にも表現手法的にも、当時の「尖端」を走っていたものです。

東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催により、35mmフィルムを上映する：

「美術と映像」を巡る作品を紹介してきた中之島映像劇場では、過去2回、東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催による上映会を開催しました。普段見る機会の少ない同センター所蔵の貴重な映像群を、ここ関西で紹介するという役割がまずあります。同時に、近年映画館のデジタル化に伴うフィルム・メディアの危機的な状況に対して、35mmフィルム上映にこだわり、その良さを堪能して頂くという意味もあります。

今回上映する映像は東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵ですが、何本かは個人やコレクターから寄贈されたフィルムからの復元です。この中之島映像劇場は上映だけでなく、眠る作品を調査し、映像の発掘と保存に関しても貢献したいと考えています。まずはその第一歩を踏み出そうというわけです。

【作品紹介】

A プログラム(記録映画編)：

《アサヒコドモグラフ No.19》(1939年／製作：朝日新聞社／9分／トーキー)

当時定期刊行していた若年層向けのニュース映画の一本で、天王寺動物園や阪神水族館(西宮市)が写っています。

《地下鉄の出来るまで》(1938年／製作：テラダ映画／15分／サイレント)

大阪に日本最初の市営の地下鉄が誕生したのが1933年(1938年には天王寺まで延伸)。この作品はその工事過程を記録したものです。

《大阪倉庫の爆発》[不完全版](1917年／製作：天活(大阪)／4分／サイレント)

1917年5月5日に発生した安治川沿いの倉庫の爆発火災の様子を記録したものと推定されます。今回上映する中では一番古い映像です。

《朝日は輝く》(1929年／製作：日活・朝日新聞社／監督：伊奈精一・溝口健二／25分／サイレント)

Bプログラムの監督、溝口健二も参加した作品です。事件発生から取材、記事化、印刷・発刊、さらには運送と、報道メディアとしての新聞の裏側を見せています。出来事の純粋な記録というより、その再現ドラマと考えるべきでしょう。

B プログラム(劇映画編)：

《浪華悲歌【なにわえれじい】》(1936年／製作：第一映画／監督：溝口健二／72分／トーキー)

社会進出を果たした主人公の電話交換手(山田五十鈴)をめぐるドラマ。複数の男性を手玉に取ることで父親の借金を清算しようとするも心は満たされず、その内に恋人には逃げられ、家族には離縁されてしまいます。大阪での現地撮影は当然として、セリフの大阪弁を含めて、当時の大阪の音風景が意識的に取り入れられていることも注意すべき点でしょう。溝口健二(1898～1956年)は、世界的に著名な監督です。1923年の《愛に甦る日》で監督デビュー以来、多数の作品を手掛けています。戦後の代表作として、《雨月物語》(1953年)があります。

上映作品はいずれも製作年代が古く、一部映像や音声の状態が良くないものがあることをご了承ください。

【中之島映像劇場】

国立国際美術館では1989年から映像作品の収集に取り組み、常設展示場で公開してきました。近年、中之島に移転してからは定期的な上映会の形を取っています。さらに2008年には「Still/Motion 液晶絵画」展を開催し、絵画と映像とが交錯し合う現代の美術表現に光を当てました。さらなる展開を図ろうと、2011年の3月から「中之島映像劇場」と名付けました。メディアに立脚した、言葉の最も広い意味での「美術と映像」の歴史的な変遷を探り、現代の状況の解明を試み、さらには今後の動向をも予示出来ればと願っています。

浪花の 映像の 物語

キネマ



NAKANOSHIMA SCREEN

東京国立近代美術館
フィルムセンター所蔵作品から

Osaka Cinema Stories
Co-organized with National Film Center,
The National Museum of Modern Art, Tokyo

2013.

3.16. SAT.

3.17. SUN.

13:00 - A Program

冒頭に解説あり(15分)

15:00 - B Program

第5回 Φ之島映像劇場

国立国際美術館

B1 階講堂



《浪華悲歌「なにわえれじい」》

入場無料/全席自由/先着130名(午前10時より当日の各プログラムの整理券を配布/1名様につき1枚)※各プログラム入れ替え制となります

主催:国立国際美術館 東京国立近代美術館フィルムセンター 協賛:(財)ダイキン工業現代美術振興財団

<国立国際美術館>530-0005 大阪市北区中之島4-2-55 <お問い合わせ>06-6447-4680(代表) <URL>www.nmao.go.jp/

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

東京国立近代美術館フィルムセンター
National Film Center
The National Museum of Modern Art, Tokyo

文庫

浪花の 映像の 物語



NAKAGISHA SCREEN

地元、大阪の映像を探訪する

今回の主題は、他ならぬ「大阪」です。時代は戦前。とはいえ、単なる回顧に留まるものではありません。この都市の持つ力が様々な局面で発揮されていた時代の映像を辿ることは、現在の大阪の姿と照らし合わせ、将来像を描くよすがになるのではと考えています。

記録映画と劇映画とを問わず、先鋭的な映像を紹介する

映像は優れた記録のメディアです。それとともに、卓越した表現のメディアでもあります。記録と表現という2つの位相は、実は劇映画や記録映画というジャンル分けにかかわらず、あらゆる映像作品に共存しています。今回のプログラムは記録映画編と劇映画編とに分けていますが、あくまでも便宜的なものです。溝口健二が双方の作品を監督していることが一つの証左です。どの作品も、内容的にも表現手法的にも、当時の「尖端」を走っていたものです。

東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催により、35mmフィルムを上映する

「美術と映像」を巡る作品を紹介してきた中之島映像劇場では、過去2回、東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催による上映会を開催しました。普段見る機会の少ない同センター所蔵の貴重な映像群を、ここ関西で紹介するという役割がまずあります。同時に、近年映画館のデジタル化に伴うフィルム・メディアの危機的な状況に対して、35mmフィルム上映にこだわり、その良さを堪能して頂くという意味もあります。

今回上映する映像は東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵ですが、何本かは個人やコレクターから寄贈されたフィルムからの復元です。この中之島映像劇場は上映だけでなく、眠る作品を調査し、映像の発掘と保存に関しても貢献したいと考えています。まずはその第一歩を踏み出そうというわけです。

上映作品 (いずれも35mmフィルム)

■ Aプログラム(記録映画編:53分):

- 《アサヒコドモグラフ No.19》(1939年/製作:朝日新聞社/9分/トーキー)
- 《地下鉄の出来るまで》(1938年/製作:テラダ映画/15分/サイレント)
- 《大阪倉庫の爆発》[不完全版](1917年/製作:天活(大阪)/4分/サイレント)
- 《朝日は輝く》(1929年/製作:日活・朝日新聞社/監督:伊奈精一・溝口健二/25分/サイレント)

■ Bプログラム(劇映画編:72分):

- 《浪華悲歌【なにわえれい】》(1936年/製作:第一映画/監督:溝口健二/72分/トーキー)



国立国際美術館

〒530-0005
大阪市北区中之島4-2-55
TEL 06-6447-4680(代表)

地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」
(3番出口)より西へ徒歩約10分

京阪電車中之島線「渡辺橋駅」
(2番出口)より南西へ徒歩約5分

展覧会情報 本上映会時には以下の展覧会を開催中です。

「夢か、現か、幻か」「コレクション展」……………2013年1月19日(土)~3月24日(日)



《朝日は輝く》



《地下鉄の出来るまで》

《朝日は輝く》

13:00 - A Program 記録映画編

《アサヒコドモグラフ No.19》は当時定期発行していた若年層向けのニュース映画の一本で、天王寺動物園や阪神水族館(西宮市)が写っています。大阪に日本最初の市営の地下鉄が誕生したのが1933年(1938年には天王寺まで延伸)。《地下鉄の出来るまで》はその工事過程を記録したものです。時代が戻りますが、1917年5月5日に発生した安治川沿いの倉庫の爆発火災の様子を記録したと推定される《大阪倉庫の爆発》が、今回上映する中では一番古い映像です。最後に上映する《朝日は輝く》はBプログラムの監督、溝口健二も参加した作品です。事件発生から取材、記事化、印刷・発刊、さらには運送と、報道メディアとしての新聞の裏側を見せています。出来事の純粋な記録というより、その再現ドラマと考えるべきでしょう。



《浪華悲歌【なにわえれい】》

15:00 - B Program 劇映画編

《浪華悲歌【なにわえれい】》

社会進出を果たした主人公の電話交換手(山田五十鈴)をめぐるドラマ。複数の男性を手玉に取ることで父親の借金を清算しようとする心は満たされず、その内に恋人には逃げられ、家族には離縁されてしまいます。大阪での現地撮影は当然として、セリフの大阪弁を含めて、当時の大阪の音風景が意識的に取り入れられていることも注意すべき点でしょう。溝口健二(1898~1956年)は、世界的に著名な監督です。1923年の《愛に甦る日》で監督デビュー以来、多数の作品を手掛けています。戦後の代表作として、《雨月物語》(1953年)があります。

上映作品はいずれも製作年代が古く、一部映像や音声の状態が良くないものがあることをご了承下さい。